2Ga-2

アメリカン・キルトの研究(6)—布の染色について

尚絅女短大　玉田　真紀

目的　アメリカのキルトに使用されてきた布は、木綿を主として、絹、毛、麻と毛の交織など様々な素材が見られる。一枚布のベットカバーやカーテンなど室内用の布、あるいは衣服だった布を再利用したり、裁ち落した後の布を使用したものが多く、それぞれの時代を反映する資料と言える。キルトの布にどんな染色や捺染技法が使われているかは、それだけでは決定的な判断基準にはならないが、キルト製作の年代や製作過程を考察する手がかりとなる。研究 (6)では、赤系の木綿の染色布を中心に、染料や捺染技法の発達がどんな影響を与えたか考察した。

方法　文献より 18世紀から20世紀の欧米における染料と捺染技法の発達を調べた。さらに、共立女子大学所蔵のキルト 60点を資料として、そこに用いられた布の染色と捺染方法について、明記されていた製作年代と照らし合わせて検討した。

結果　赤、橙（茶を含）、黄、緑、青、紫、黒系の色相別に、どんな染料が用いられてきたか考察した結果、赤系の特に鮮やかな赤の木綿布は、染料の発達と共に、かつては高価で憧れだった布が手軽に購入できる布になり、キルト製作に影響を及ぼしたことがわかった。西洋茜で染めたターキーレッドはアメリカでは輸入された高価な布だった。コチニールの染料も西欧を経由して入ってきており、鮮やかな赤の布は、1869 年アリザリンが合成されアメリカでも生産可能になって初めて一般に手に入る身近な布となった。この赤の布は洗濯しても泣き出さない布として白と組み合わせたキルトがたくさん作られた。赤の刺繍糸で図柄を入れたキルトの流行ももたらした。鮮やかな赤の布とその染料の識別は今後キルトの製作年代を判断する手がかりとなると思われる。